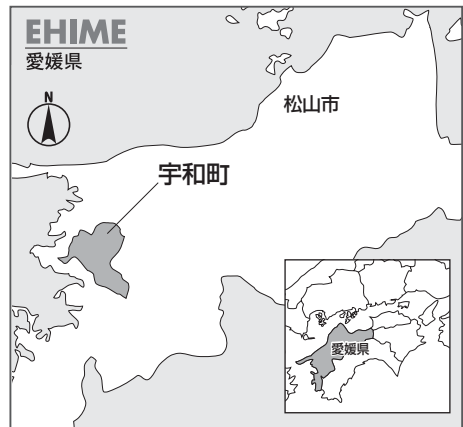


愛媛県

う わ ち ょ う 宇和町

女医発祥の地から シーボルト誕生の地へ



UWA国際交流協会

はじめに

宇和町は愛媛県の南西部に位置し、昭和二九年、六カ町村が合併して生まれた。当時の人口は約二万四〇〇〇人、現在は一万八〇〇〇人である。面積は一三三.四km²で植林が行き届き、名木宇和松を産出するほか、約一五〇〇haの水田が広がり、古くから穀倉地帯として栄えてきた。

町の中央を国道五六号線やJR予讃線が走り、交通の要衝として発展しており、来年四月には、周辺四町と合併して人口四万七〇〇〇人の西予市(新市名称)が誕生する運びとなっている。宇和町は新市誕生に伴い、新市の本庁舎が置かれることになっており、西予市の中心地としての発展が約束されている。合併とともに高速道路も完成し、松山市と四〇分で結ばれることになり、来年はさまざまなイベントが計画されている。

歴史を生かした町づくり

宇和町は鎌倉時代中期に公家大名西園寺氏の領地となり、宇和荘の中心地として栄え、南伊予を長らく支配したが、豊臣氏に滅ぼされてからは伊達氏が支配するようになり、宇和島藩の宿場町としてにぎわった。幕末には、長崎鳴滝塾でシーボルトに学んだ蘭方医、二宮敬作が藩主伊達宗城公の命により医業を開業し、二二年間にわたって仁術を尽くした。敬作は恩師シーボルトの約束通り、長崎で一四歳になっていた娘イネを卵之

町に呼び寄せて五年間教育、後に楠本イネは日本初の女医へと育った。美しいおイネさんが男装して敬作からさまざまなことを学んだ様子が今も語り継がれている。

宇和町の先哲として開明思想を弟子に教えた二宮敬作亡き後、弟子たちは近くの大師堂に儒学者を招き、さらに申義堂を建て、明治初期には開明学校(国重要文化財)へと受け継がれ、今日、明治・大正・昭和時代に建てられた学校群の残る町として聞こえている。幕末の町並みの残る県指定文化の里では、二宮敬作やイネの活躍した時代から後に育まれた英傑たちも共に偲ぶ先哲供養や文化の里まつりを通じて、二宮敬作や楠本イネの顕彰が続いている。

UWA国際交流協会設立

日本各地で進み始めた国際交流の気運がわが町でも膨らみ、平成五年四月、町の支援により、町民有志がUWA国際交流協会(愛称:ペガサス)を発足させ、約二〇〇人の会員を集めて設立総会を開催した。ペガサスの主な事業は、中高生の海外派遣事業と国際交流の推進事業である。

学校ぐるみの協力や国際派町長の理解により、第一回派遣生をドイツ・ヴェルツブルク市へ派遣することが決まった。ヴェルツブルク市のシーボルト協会からホームステイを歓迎する旨のFAXが届き、中高生及び随員一四人が、おイネさんに代わって父シーボルトの生誕地を表敬訪問した。町の歴史を生

かした中高生のシーボルト生誕地探訪は話題を呼び、以後順調に進み、町民の理解も浸透していった。

中高生感動のホームステイ

シーボルト協会のクライン・ラングナー理事長夫妻の卓越したリーダーシップにより、ヴュルツブルク市での中高生ホームステイ事業では、シーボルト協会事務所のあるシーボルト博物館でホストファミリーと対面して、五日間のホームステイを楽しんでいる。別れるときには涙を流すシーンが毎年見られ、生徒たちにとって最も感激し「成人してからまた来ます」と決意する瞬間でもある。

ドイツにおける日本年に参加

人口一万八〇〇〇人の小さな町から毎年一人の中高生を送り続ける宇和町。しかも、シーボルトの娘イネが育った町から。ヴュルツブルク市シーボルト協会のクライン・ラングナー理事長は九九年、熱心なUWA国際交流協会に一つのプレゼントを発した。「ドイツ



↑当町の国重要文化財・開明学校を訪れたヴュルツブルク市民一行

ツにおける日本年に参加する形で、シーボルト博物館でイベントをやらせないか」という提案だった。

早速、協会は町と検討して宇和町展覧会を計画、学芸員を派遣して展示の準備を進める一方、町民一〇〇人がオーブンゲセルモニーに出席し、郷土芸能五ッ鹿踊や牛鬼パレードなど、市街に繰り出して宇和町展覧会PRした。シーボルト博物館での宇和町展覧会式典では、参加した宮司二人が古式ゆかしい白装束で神事を挙行。二礼四拍手一拝の出雲式玉串奉典をするヴュルツブルク市長も緊張気味だった。

来年一〇月ミュージカル派遣

中高生の派遣を通じて深まった交流の輪はさらに広がりを見せ、「来年一〇月にはヴュルツブルク市誕生一三〇〇周年にミュージカルをぜひ」との要請が届いている。ヴュルツブルク市からはこれまでわが町に二度の市民訪問団、シーボルトの子孫や高校生ら約七〇人が訪れており、当協会ではクライン・ラングナー氏の期待にこたえてミュージカル「オランダおイネ一番星咲いた」(松山市・みかん一座)の派遣を決定するとともに、来年一〇月、約一〇〇人以上の参加者を募集してミュージカルツアーを送ることにしている。

留学生ホームステイ事業

ペガサスでは欧州への中高生派遣事業のほかに、これまでにマレーシア青年やブラジル青



↑メキシコ自治大学生と町産業文化祭で交流

年のホームステイ、メキシコ自治大学生による環境美術展開催など、さまざまな交流を展開して町の外務省的役割を担っている。毎年四月末に行われる町最大のイベント「れんげ祭り」に合わせて、愛媛大学の留学生を一泊ホームステイに招待して町民との接触の機会をつくっており、約三〇〇人の世界各国からの留学生が宇和町へやって来る。

当協会は平成一四年度世界に開かれたまち総務大臣表彰の荣誉に浴したが、その祝賀会ならびに一〇周年記念式典の席上、来賓出席したクライン・ラングナー氏は「宇和の青少年を通じた国際交流への投資は決して間違っていない。なぜなら、このような交流事業が全世界で行われたら、戦争は起きないでしょう」と力説した。

これまで一〇年間で海外派遣した青少年は一四〇人余り。成人したOBの中には協会の理事となって貢献する者も増え、協会の未来は明るい。

東京都

ぶ ん き ょ う く

文京区

外国籍住民とともにつくる多文化社会をめざして
～隣人としての住民活動のための小さな歩み～



文京区国際協会

大学のある街・文京

東京二三区のほぼ中心に位置する文京区においても、外国人登録者数は二〇〇一年一月ごろから急増し、地域の国際化の波が押し寄せている。二〇〇三年五月現在、人口一七万四六〇〇人に対し、外国人登録者数は六四三〇人、人口に占める割合は三・六八％で、全国平均の約二・五倍と、かなり高い比率になっている。特徴としては、「留学」という在留資格で在任している人が一八・九％（二二・四人）と、全国平均の約三倍にも上っている。この数字は、文京区に登録しているいわば夜間人口であり、区内には留学生数二〇〇〇人で全国第一位の東京大学をはじめ、合計一〇余りの大学を抱えている土地柄なので、実際には、これよりはるかに多くの留学生をはじめ外国人研究員やその家族等が行き交う地域である。

一九八三年に文京区国際友好交流協会が設立されてから一九九九年目の二〇〇二年、文京区国際協会と名称を改め、新しいスタートを切った。この間、文京区の国際化の進展は著しく、多くの課題への対応を迫られる状況となってきた。それは人数面にとどまらず、就労外国人の多様化や国際結婚の増加などと並行して在任外国人の定住化傾向も進展し、留学生等の家族滞在者の増加とも相まって、日本語習得や子どもの保育、教育や医療など、多岐にわたったサポートの必要性が高まっている。在住外国人が「市民」として

暮らしやすい地域とするために制度を整備し、情報提供を充実することは、第一義的には行政の役割であろうが、地域の国際化の真の意味を考えるなら、同じ地域に住む住民が、生活レベルで主体的に外国人住民と友好関係を築いていくことが大切である。こうした観点から、区国際協会の果たすべき役割を模索し、それまでの姉妹都市交流中心の国際交流から、在住外国人と共に生きる地域社会をつくっていく活動へと重点をシフトしたのである。

協会の活動から 「二つの大きな柱を中心に」

文京区における外国人交流・支援活動は、二つの活動を中心に展開している。

一つは、日本語ボランティアによる、外国人と日本語で交流する「日本語交流員活動」であり、文京区の特徴といえる。日本語でボランティアをする活動は、「日本語交流員養成講座」の受講からスタートする。この講座の特徴は、講義と並行して実際に東京大学の留学生やその家族との一対一の交流活動を行う点である。講座受講者は合計二〇〇人以上にも及んでいる。二〇〇二年一月からは、ボランティアによる日本語教室も週二回実施している。そこは、単に日本語を学ぶだけでなく、日本人との交流の幅を広げる場となっている。さらには、外国人が生活していく中で生まれてくる相談の受け皿であったり、地域の生活情報を得る場であったりと、外国人



↑日本語教室

ボランティアを中心としたこれらの活動において、同じ地域に暮らす者同士というメリットは大きい。さらに、区から委託を受け実施している外国人相談は、個々の相談に対応する機能

にとつて新しい環境で暮らすことのバリアを軽減する機能を果たしつつある。

もう一つが、語学ボランティアによる多言語通訳・翻訳活動である。二〇〇二年度から、都内の他市区の協会とネットワークを組み、通訳・翻訳ボランティアの積極的な運営により、多言語対応の無料専門家相談会を実施している。しかし、問題点として、外国人にとつてこのような情報が一部の外国人にしか届いていないこと、外国人にとつての必要情報、地域に暮らす中で抱えている問題の把握ができていないことなどが挙げられる。今後いかに現状を把握し、外国人にインフォメーションを届けるかが課題となっている。通訳・翻訳ボランティアは、多言語対応の必要な外国人に対し、いかに必要な日常情報を届け、また日本社会を知ってもらえるかを模索しつつ活動を広げ始めている。

この二つの活動を中心に、協会では、そのほかにも日本文化紹介や異文化体験事業、講演会など、できる限り会員や外国人のニーズに耳を傾ける姿勢で事業を展開している。

にとどまらず、外国人の声を聞き、置かれた状況を知り、そこから協会活動の必要性を探る上でとても重要な役割を果たしている。

地域のネットワークを大切に

市民レベルの国際交流・支援を進めるために、自治体や協会の果たせる役割は限られている。その意味でも、ネットワーク活動は協会活動にとつて非常に大切である。この数年間で、いくつかの側面から地域のネットワークづくりにも着手してきた。

文京区内の大学に加え、(財)アジア学生文化協会をはじめとするNGO団体が区内で活動している。これらとネットワークを結び、互いに協力し合うことは協会にとつて重要である。二〇〇二年度には区内で活動する日本語ボランティア団体同士のネットワークを発足させた。また、専門家相談や後述のフェスティバル、イベント等を通じて各機関とのネットワークづくりを推進している。

二〇〇二年度は、教育や保育などにかかわる行政担当の方々を呼んでのボランティア対象の勉強会、地域の小学校との連携によるボランティア日本語教室の立ち上げなどを行った。小学校などから国際理解教育への協力依頼も多い。そのようなとき、地域に住む外国人の参加の可能性を提案し、しかも単発でなく継続的、日常的な交流を極力お願いしている。このような形で域内の行政、教育関係のキーパーソンとのネットワークづくりにも力を注いでいる。

在住外国人と地域社会

協会では、在住外国人同士が横のつながりをつくり、彼ら自身の地域社会への参画を目的に、二〇〇一年秋から外国人懇談会を実施してきた。このメンバーからの声に基づいて二〇〇三年三月に協会として初めて、国際フェスティバル「BIAちいさな地球村のつどい」を実施した。外国人、日本人が「一緒に活動する」ことによって、外国人が自らの存在を地域社会にアピールし、文京区が外国人にとつてより開かれた地域社会となるためのきっかけづくりとすることが目的だった。懇談会メンバーはもとより、前述の日本語教室学習者など多くの外国人がスタッフとして参加して実施されたが、当日会場には、一〇〇〇人を超える日本人をはじめとして予想以上に多くの外国人が訪れた。まだ一歩を踏み出したばかりであるが、この日、多文化社会の小さな可能性を見出した人は少なくないのではないだろうか。

「国籍にかかわらず、誰にでも暮らしやすい社会、能力があれば活躍できる社会、多様な文化で活気あふれる社会……そういう社会で日本があつてほしい」。二〇〇二年二月に実施したシンポジウムの中でパネリストとして参加した外国籍の方の言葉である。「文京」という地域社会づくりに向けて、協会の果たすべき役割を常に考えながら、行政と連携をとりつつ、これからも市民主体の活動を推進していきたいと考えている。